# 巻　頭　言

日本白鳥の会会長　松　井　　繁

白鳥給じ（餌）反対論は昭和40年代の後半から，思いだしたように時々地方のマスコミを賑わしている，古くて新しい問題である。文芸春秋の昭和46年７月号にＨ氏が「１万羽の白鳥がえさ（餌）を貰えると勘違いして滞在しつづけ，3,000羽の白鳥が犠牲になった」との趣旨のエッセイを発表した。この文章が発端となり，以後マスコミをはじめ多くの人がこれを引用し，給じを否定し，「自然のえさ」をと言うようになった。事実は寒波で野付湾が結氷したが，その下にある豊富なアマモを期待し，寒波のゆるむのを待っていたのである。この湾に注ぐ春別川が結氷し，真水が飲めなくなったのも一因である。餓死し始めてから河口の氷を切り，給じを始めたのである。この時の公表では200羽が死亡とのことであったが，推定500羽とされている。

白鳥が逆立ちしてえさの採れる深さは１ｍ前後である。このように浅い潟や沼は殆どが干拓の対象となった。北海道では，道央部の馬追（まおい），長都（おさつ），遠浅（とうあさ）沼，この他石狩川流域の三ケ月湖が大部分干拓されている。本州では秋田県の八郎潟，新潟県では潟湖の90％が，石川県で河北潟，邑知（おうち）潟，そして島根県では中の海の多くが干拓された。このように見て行くと自然のえさ場が減少しているのが分かるであろう。環境庁によると，戦後から1978年までに埋立てなどで約２万８千８百ヘクタールの干潟や湿原が消えた。自然のえさをと言っている人たちはこのあたりの事情を知って言っているのだろうか，と疑問を持つものである。

環境庁のガン・カモ科鳥類の生息調査報告書で見ると，２年前はオオハクチョウ約２万５千羽，コハクチョウは約１万５千羽。本来はオオハクチョウ２万７千羽，コハクチョウは２万２千５百羽である。コハクチョウはこの２年でほぼ７千５百羽増えている。この勢いで増えて行くとは考えられない。けれどもこの10年間のコハクチョウの増加を同報告書で調べると1982年の5,064羽が今年は22,473羽と４倍になっている。これに対してオオハクチョウは２倍である。自然のえさ場はどの位あるのだろうか。どうも気になる白鳥，特にコハクチョウの自然増である。

終りに，本年春の叙勲で当会顧問の三上士郎先生に，長年にわたる鳥獣保護の功績により勲五等瑞宝章が授与されました。会員一同この栄誉をたたえ，心からお祝い申し上げます。